

J **apanese text**

2017年 春/夏号 日本語編

巻頭特集

緑陰の九州、工芸を巡る旅

写真＝鈴木一彦 (p.16-25、30-33)、坂本正行 (p.26-29)、齋藤幹朗 (p.34-35)

文＝西村晶子 (p.16、20-25)、萬 眞智子 (p.26-27)、片柳草生 (p.18、30-33)、安藤菜穂子 (p.34-35)

p.016

緑溢れる初夏を舞台に、豊かな工芸文化が息づく九州を旅しましょう。佐賀県では唐津焼の伝統に今の感性を重ねながら進化し続ける新鋭たちを、そして長崎県の隠れ里では匠の技法を伝え継ぐ陶工たちを訪ねます。鮮やかな色彩で魅了するのは、長崎県で花開いたガラス“びいどろ”の物語。大分県では、手仕事が生み出す上質な日常の道具として、いま新たに脚光を浴びる竹細工の魅力に出会えます。

(p.016)

染付磁器の技を磨き続ける、長崎県の三川内焼「平戸松山」の陶房にて。代表的な唐子の絵柄は、主人だけが手がけるもの。

右ページ：おらかな気風のやきもの町・佐賀県の唐津では、窯から煙が立ち上るのどかな情景と出会う。

(p.018)

「籠は縁次第」と言われるように、縁がしっかりしていれば籠は長く使用できる。大分県竹田市の竹細工師・桐山浩実さんが作る籠は、何重にも補強された竹ひごの力強い縁が特徴的。

右ページ：大分県は日本一の真竹産地。弾力に富み、緻密な表皮はつややかな光沢を放つ。籠細工には4～5年目の竹が最適。桐山さんはいつも工房近くにある紙漉地区の竹林や岡城跡周辺に竹を探しに行く。

陶芸

——佐賀・長崎

p.020

多彩な技が生み出す「盛りたくなる器」

大陸や朝鮮への玄関口で交易の港だった佐賀県の唐津は、唐津焼の発祥の地であり、やきものに触れながら、山海の幸を巡る散策が楽しめる城下町。「見るものすべてが美しく、日本人が大切にしてきたいい暮らしがあり、食材もとても豊富。初めて見る魚や果物、鯨肉が売られているのにはびっくりしました」と今回の旅に同行してくださった大原千鶴さん。「唐津は20数年前に母たちと訪れて以来のことで、そのときは伝統的な唐津焼を見せてもらいました」。今回は、日常の食卓をより楽しくする器を求め旅へ。

伝統的な唐津焼というと、土の質感を生かした素朴で野趣に富む肌合いを思い浮かべるが、岡 晋吾さんの器は白磁、青磁、粉引、染付、赤絵など、実に多彩だ。岡さんは骨董や全国各地のやきもの研究に長年取り組み、釉薬の配合や土のブレンドを試みるなどして独学でものづくりに挑戦してきた。最近では料理店や窯元のプロデュースも手がけるといふ。「過去のものやデータを参考にするだけでなく、器を使う立場になっても考えます。白色は明度やトーンを変えるようにし、呉須はいろいろな濃淡を揃えています」。

岡さんのアトリエで、料理を実際に盛ってみるのに大原千鶴さんが手にしたのは、白磁、安南色絵、銀彩の器。涼しげな青みを帯びた白と、涙形や高台の変形皿を取り混ぜ、唐津の美味を引き立てた。「磁器なのにやさしい風合いで、独特のやわらかさやぬくもりが感じられます。使い手に委ねる自由さがあるので、家庭料理を盛るのにぴったり」。この日は岡さんの奥さまで同じく陶芸家のさつきさんも加わって、楽しい酒宴のひとつとなった。

左：大原さんは唐津市内の市場で選んだ地元食材を持って岡さんのアトリエを訪問。即興で料理をし、岡さんの器に盛りつけた。魚の“唐いっさき”(イサキ)はあら炊き、鯨はお造り、パプリカはおひたしに。「岡

さんはいろいろな様式の器を、使う人のことを思いながら作っておられることが、実際に料理を盛ってみてより強く感じました」と大原さん。器は手前から、「銀彩鉄絵片口向付」、「白瓷六寸平皿」、「呉須色絵白金彩石榴文鉢」、「白瓷筋文高台皿」、取り皿は「灰白瓷陽刻文オーバル小皿」、「緑彩白金彩小碗」。

上：持ちやすくて注ぎやすい「白瓷縞注器」。

大原千鶴 (おおはら・ちづる)

京都・花脊の料理旅館に生まれ、幼い頃より料理の感性を磨く。現在は中京区に住み、季節感を大切にしたい美しくおいしい家庭料理を提案する料理研究者として活躍。

岡 晋吾 (おか・しんご)

1958年長崎県佐世保市生まれ。肥前諸窯に勤務後、35歳で独立。2003年唐津に移転、築窯。

天平窯

佐賀県唐津市浜玉町大字東山田 1328-1

11:00~17:00

不定休

Fax 0955-56-2061

tenpyougama@gmail.com

www.tenpyougama.com

p.022

古陶の美に魅せられた新鋭たち

豊かな漁場で知られる呼子の海を一望する、陶芸家・矢野直人さんの陶房を訪ねた大原千鶴さん。矢野さんと同世代で、唐津で作陶に励む竹花正弘さんと浜野まゆみさんも集い、古今の唐津焼への思いが語られた。

留学先のアメリカで自分の原点を見つめ直し、家業のやきもの世界に入った矢野さんは、30歳の時に桃山時代の古唐津の名品に出会い、その力強さに魅了された。「今は古唐津の窯元があった土地から砂岩を採取し、土や釉薬などの材料は自分で作っています。昔の職人と同じやり方で時間も手間もかかりますが、繰り返すことで少しでも古唐津の本質に近づけたらと思っています」。

12年ほど前に山深い唐津北部の巖木町に移り住み、自分

で作った昔ながらの割竹式登り窯で作品を焼く竹花さんもまた、古唐津を手本にさまざまな様式に取り組んでいる。「古いものはいろいろなことを教えてくれ、気付かせてくれます。古唐津を知ること、自分だけではわからなかったことが一つずつ見え、新たな一歩を踏み出せるようになりました」。

大学時代に専攻していた日本画から、用途のあるものづくりをしたくて器の世界に転向した浜野さんが力を注いでいるのは、17世紀の一時期だけ流行した“糸切成形”。轆轤ろくろを使わず、粘土を型に押しつけて形を作り、はみ出した部分は糸で切り出して作る、現代ではほとんど見られなくなった成形手法だ。「以前本物に触ったんですが、その感触に感動して、絶対にこれがやりたいと思いました。古い仕事ですが、私にはじっくりくるんです。今はなんとか形ができるようになったところで、400年の歴史の入り口にやっと立った感じです」。

先人たちの仕事をたどり、紐解かれた伝統に尊敬の念を寄せ、作陶に取り組んでいる3人だが、最近では使いやすさや使うことによって生まれる“用の美”も考えるようになっていくという。盛りやすいサイズや料理に合う地肌や形について、料理家である大原さんに尋ねる場面もあり、ものづくりの途上で挑戦はまだまだ続くことを窺わせた。

(p.023)

左ページ：大陸に最も近い唐津・名護屋に集った（右から）竹花正弘さん、大原さん、浜野まゆみさん、矢野直人さん。「唐津にはやきものづくりに向く素晴らしい土壌があり、大陸から渡ってきた技術や気風が今も残っています。皆さんの器にもそれが脈々と受け継がれていると感じます」と大原さん。

右：手前から時計回りに、「絵唐津五寸皿」（竹花正弘作 以下T）、「白磁くちなし形皿」、「染付紫陽花紋木瓜形皿」、「色絵櫻花紋ぐいのみ」、「色絵櫻花紋徳利」（すべて浜野まゆみ作）、「朝鮮唐津向付」（矢野直人作 以下Y）、「絵唐津瓜文様鉢」、「粉引耳付小鉢」（ともにT）、「朝鮮唐津板皿」（Y）。

下、左から：古唐津の素朴な風合いや寂びた色をさらに一歩進めんと試みる、矢野直人さんの絵唐津。江戸時代に使われていた有田町の泉山陶石を使い、柿右衛門の絵付を写した浜野さんの色絵。印花文を押しつ

けて柄を浮き立たせる、朝鮮の昔の技法を今に伝える竹花さんの三島唐津。

浜野まゆみ (はまの・まゆみ)

1974年埼玉県川越市生まれ。武蔵野美術大学日本画科を経て佐賀県立有田窯業大学校に進学。伝統工芸士・秀島和(かず)海(み)氏、「李(リ)荘(そう)窯」寺内信二氏に師事し、2001年川越に開窯。2013年より有田で制作。

竹花正弘 (たけはな・まさひろ)

1974年東京都生まれ。熊本大学卒業後、唐津市の「あや窯」で修業し、2003年に独立。一人で窯づくりと小屋づくりを手がけ、古唐津を手本にやわらかい焼きを追求している。

矢野直人 (やの・なおと)

1976年唐津市生まれ。5年間のアメリカ留学を経て佐賀県立有田窯業大学校に進学。卒業後、嘱託講師として勤務した後、2004年より実家の殿山窯にて作陶を始める。2008年韓国・蔚山(ウルサン)にて6か月作陶、古唐津のさまざまな様式に挑戦している。

殿山窯

敷地内には2つの窯があり、ギャラリーも併設する。
佐賀県唐津市鎮西町名護屋 1288
Tel. 0955-82-4162
9:00 ~ 17:00
不定休

p.024

隠れ里に息づく白磁の美、染付の技

長崎県佐世保市の南側に位置する三川内で生まれた三川内焼は、豊臣秀吉が16世紀末の文禄・慶長の役の際、李朝朝鮮より連れ帰った陶工、巨関が平戸に窯を開いたことが起源とされる。当初は陶器だったのが、陶石の発見により白いやきもの(白磁)が作られるようになり、平戸藩の御用窯となつてからは、透けるような白と技巧を凝らしたやきものを次々に誕生させる。

藩への献上品を手がけた三川内焼は、工芸の粋を感じさせる技巧や細やかな絵付けが特徴。その伝統は今も連綿と

受け継がれ、「嘉久房窯」の今村均さんは50余年精緻な技法と白に徹した手捻りや透かし彫りの細工を手がけている。どんなに精密な細工であっても分業はせず、パーツに分けずに一体で焼成し、「白の薄手一筋。先人に負けぬものを作るには、ひたすら作り続けることです」と今村さんは穏やかに語る。

一方、三川内焼を代表する染付の唐子絵を手がけているのが「平戸松山」の中里月度務さんだ。「筆の運びと青の濃淡で描く唐子絵は窯ごとの個性があります。うちは唐子の表情や動きで可愛らしさを追求し、そのため筆は使い分け、目や鼻は専用の筆で描いています」。圧倒的な技の中に、微妙な手加減でわずかに見せる作家の感性が見てとれる。

(p.024)

中里月度務 (なかざと・つとむ)

1968年平戸松山の長男として生まれる。有田窯業大学校卒業後、東京・赤坂の「陶香堂」にて修業。1991年より父の15代平戸松山に師事。2013年伝統工芸士の認定を受ける。

平戸松山

長崎県佐世保市三川内町 901
Tel. 0956-30-8657
9:00 ~ 17:00
不定休

(p.025)

今村均 (いまむら・ひとし)

1942年三川内町に生まれる。佐世保南高等学校卒業後、陶芸家、高鶴夏山に師事。1961年13代悦山・今村鹿男の指導を受け、1969年14代平戸悦山となる。2014年「捻り細工技術」佐世保市指定無形文化財指定。

嘉久房窯

長崎県佐世保市三川内町 692
Tel. 0956-30-8520
10:00~17:00
不定休

左ページ、左奥：唐子の絵付けと青海波を組み合わせた、三川内焼の技の集結といえる「平戸松山」のティーカップ。右上：「献上手唐子図大皿」、「献上手唐子図細首花瓶」、「唐子置物」。

このページ：「嘉久房窯」の作品はつややかな白と精緻な技巧が魅力。左上・手前から、機能美を備えた大小の「三つ葉仲付け小鉢」と「四方押し珍味小鉢」。右上の白龍は、鋭い牙や爪、逆立つ鱗、髭やまつげの描写がまるで生きているかのような迫力だ。

びいどろ ——長崎・佐賀

p.026

異国の輝きに魅せられて

佐賀県の「^{そえじま}副島硝子工業所」で現在販売されている。(左から)「鶴首瓶」6480円、「藍色のちろり」1万800円、「紅色のグラス」3456円。昔のままに「ジャッパン吹き」という技法で作る国内唯一の手づくりガラス。

p.027

奈良・東大寺の正倉院に残された大量のガラス玉や器、また、仏像胎内の舍利容器や仏像の装飾のために用いられてきたガラス。奈良時代にはガラスは日本国内でも作られていたといわれている。ところがその後、自然消失し、中国からの渡来品がもてはやされるようになった。

そんな日本が再びガラスづくりに乗り出したきっかけは、1543年にポルトガル船が鹿児島県の種子島に鉄砲を伝えたことにはじまる、南蛮船の出現だった。キリスト教宣教師フランシスコ・ザビエルは周防(現・山口県の一部)の有力大名だった大内義隆に鏡や遠眼鏡などのガラス製品を贈ったと記録に残っている。以後、織田信長や足利義昭への進物としてもガラスが贈られており、宣教師がより歓迎されるようになった。

今なお異国情緒溢れる町、長崎は江戸時代には海外貿易の中心地として繁栄した。17世紀後半には、長崎では日本人の手によるガラスもふたたび作られるように。しかし江戸期の日本のガラスは鉛の含有量の多い鉛ガラスが主流で、当時の欧州で作られていたアルカリ石灰ガラスとは異なっていた。製作工程は中国の宋代の技法に最も近く、16世紀以前

に中国からガラス文化が伝来したという説が有力とされている。また「ガラス」とはオランダ語で、江戸時代の日本ではポルトガル語の「びいどろ」と呼んだり、表面の模様をダイヤモンドで彫ることから、切子のことをダイヤモンドを意味する言葉がなまった「ぎやまん」と呼ぶようになった。

南蛮船の出入りによりもたらされたガラス文化、そしてそれより以前に伝わった中国式のガラス製法を取り入れた「長崎びいどろ」は、18世紀初頭から京都や大阪へと伝播し、江戸へ、そして佐賀や薩摩(現・鹿児島県の一部)へと伝わった。佐賀藩主の鍋島氏は幕末・安政年間(1854～1860)に精錬方を設立。ガラス窯を築き、明治維新後は食器やランプなどを作る精錬社という民間会社をも運営した。精錬方の筆頭番頭を務めたのが、明治36(1903)年、^{そえじま}副島硝子工業所を創業した副島源一郎氏。当代の太郎氏の祖父に当たる。藍色や紫、緑色や赤など美しい色に日本人らしく蒔絵を施したり、形も鶴首や鳥籠など和風なものが目立つ。今に伝わる作品を眺めると、藍色の器に、遠く海の向こうに心を馳せた人々の歴史が秘められているようだ

(上)

右:右より「蒔絵菊桐文鶴首徳利」高さ18×底径8cm、天保頃。宙(ちゅう)吹き紫徳利の胴に菊と桐の文様、金箔を施している。「徳利」高さ24×底径7cm、天保8(1837)年製で藍色が鮮やか。ともに雲仙ビードロ美術館所蔵。撮影協力/雲仙観光ホテル

雲仙ビードロ美術館

長崎県雲仙市小浜町雲仙320 Tel. 0957-73-3133

左下:「副島硝子工業所」で創業以来受け継がれている「ジャッパン吹き」。2本のガラスの吹き竿を使う宙吹き技法。

副島硝子工業株式会社

佐賀県佐賀市道祖元町106 Tel. 0952-24-4211

(下)

慶応元(1865)年に創建され、原爆投下により被害を受け再建された大浦天主堂は、長崎のキリシタン文化発祥の地。中央大祭壇から内陣を見渡す左右の窓には、色ガラスがはめ込まれ幻想的な雰囲気醸し出している。

大浦天主堂(国宝) 長崎県長崎市南山手町5-3 Tel. 095-823-2628

ななつ星 in 九州

p.028

九州工芸の粋を詰め込んだ夢の豪華列車

2013年より運行を開始し、各所で話題を呼んでいるクルーズトレイン「ななつ星 in 九州」。日本版オリエント急行とも呼ばれ、そのおもてなしや、食事、景観はもちろんのこと、デザイナー水戸岡鋭治みと おかえい じさんの情熱と、九州工芸の粋が集められた車両の端麗さでも耳目を集めた。

全部で14ある客室の内装はすべてデザインが異なり、床や壁の素材の組み合わせ、ファブリックの柄や飾られている絵、サニタリーの洗面鉢、どれ一つとして同じ組み合わせがない。しかもこの洗面鉢は佐賀・有田焼の人間国宝であった故十四代・酒井田柿右衛門さかい だかきえもんの作。ラウンジカーや各部屋の入り口には、福岡・大川組子の細工おおかわくみこがふんだんに。インテリアにも木材が贅沢に使用されており、シャワータイムは檜の香りに包まれながら快適に過ごすことができる。また車内で使用されるチョコレートカップは有田焼の十五代・酒井田柿右衛門の作と、目にするものの99パーセントがオリジナルで作られた逸品。これだけの贅を尽くした列車は世界でも例を見ない。沿線の風景を眺める客室の窓にもこだわりが。窓の内側は木戸、木のロールブラインド、障子、カーテンと多重構造になっていて、乗客自身が光を変えて景色を楽しむ趣向。長い通路には200枚以上の絵が飾られ、ステンドグラスやオブジェも各所に。列車の中を歩いていくとまるでミュージアムのように次々と見所が現れる。

列車での旅のあり方を変えたともいわれる「ななつ星 in 九州」。想像を超えた豪華な列車で、九州工芸とそれを生んだ大地の魅力を堪能したい

左より、

- ・十四代・酒井田柿右衛門さかい だかきえもんさんによる「魚藻紋」の洗面鉢。
- ・古代漆色こ だい じ いろが美しい車体とおもてなしを支えるクルーたち。
- ・デラックススイート702号。寝室の仕切りは大川組子で作られ、職人の緻密な技が光る。ガラス扉にも組子のモチーフが使用され、美しい統一感を醸している。
- ・地元のワインや焼酎、フルーツジュースなどを使って作られたななつ星

オリジナルカクテル。

ななつ星は現在「一泊二日」と「三泊四日」の2ルートで運行中。

※ルートは2017年3月現在

ななつ星の旅：次回は2017年4月1日より受付開始。

www.cruisetrain-sevenstars.com

竹 ——大分

p.030

竹工芸の里をたずねて

天を目指してまっすぐに伸びた真竹が、ぎしぎしと音を立てながら風になびいて揺れる、そのしなやかな姿。素人目にはどれも同じように見えるが、「北と南では生える向きも違うし、岡城周辺の竹と、標高約400メートルにある工房近くの竹とでは、性質も微妙に違う」のだと、竹を吟味していた青物竹細工師の桐山浩実さんが教えてくれた。一本一本竹をゆすり、叩いた時に響く音を聞いて、しなり具合や硬さをしっかりと確かめる。「竹を選ぶ時が一番緊張します」。この道26年にして竹を見極める眼差しは真剣そのものだ。

油抜きをした「白竹」ではなく、伐ったばかりの「青竹」を原料とする青物細工の籠やざるは、かつては農業にも漁業にも使用され、人々の暮らしを支える民具として日常的に用いられてきた。青物細工は伐採から竹ひごづくり、編みまでをも一人で担当するため、今では職人も数少ない。大分でも主流は白物の竹細工だ。しかし桐山さんは「材料の最初の状態から責任を持つ」この青物に手仕事の原点と魅力を感じている。日本一の真竹産地である大分には良質な竹が群生し、生まれ故郷の奈良を離れて移住を決意する決めの一つとなった。

「現代の暮らしに必要とされる籠を作りたい」と幾度も口にする桐山さん。過剰な装飾を排して、引き算から生まれる機能美を備えた籠こそ桐山さんの目指すもの。シンプルに見え

る中に、見えない部分の補強といった細かな工夫を重ね、実用に耐える籠への努力を惜しまない。

「籠の形は暮らしの形」。ひと編みひと編みの積み重ねが作り出す力強い形には、桐山さんの意志がみなぎり、暮らしに沿う美を宿している。

右上：箴を改造した工房は、5メートルもの長い竹ひごを扱うのに具合がいいよう工夫されている。

右下：最広幅 6.5 ミリ、厚み 1 ミリのひごを編む手は休む暇なく動く。カーブの部分は曲げ癖をつけながら押さえ、ほかの指で長いひごをさばきながら編み進んでゆく。「指はすっかり分厚くなりました。手仕事ならではのですね」と言う桐山さん。一番大事な 10 本の道具だ。

桐山浩実（きりやま・ひろみ）

奈良県出身。大分の訓練校を卒業後、職人たちを訪ね歩き、過去の優れた民具に学びながら、自学自習で技を磨く。職人として生きるだけでなく、田畑を耕し、ほぼ自給自足の半工半農の暮らしを送ることで、昔の人の暮らしから生まれてきた竹籠の意味を見つめ直している。

bamboolife.web.fc2.com

www.facebook.com/aotakekobo.kiriyama/

5月10日～5月17日 工藝マエストロ（長野）にて個展

8月30日～9月11日 日本橋高島屋（東京）にて民藝展

11月 日本橋三越（東京）にて個展

(p.031)

桐山浩実さんによる青竹細工の籠。青竹は使い込むほどに深いあめ色になっていく。工房のある大分県竹田市の山城、岡城跡にて。

p.032

竹の可能性を模索する

元中学校の音楽室に作った工房の棚には、輪投げのような軸に収まったアートピースのパーツたちが出番を待っている。極細の竹ひごを曲げて三角形にしたそれらは、火であぶって形を作る伝統技法から生まれた。それらが幾つも連なって生まれるのが中臣 一なかとみ はじめさんが取り組むアート作品「プリズム」シリーズだ。

「光のきらめきを表現したくて幾何学形にしたんです」という中臣さん。編まれることが基本の竹工芸において、「編まない」こと、「完結した形を組み合わせる」ことをテーマ

とした自由で軽やかな作品だ。伝統工芸のパターンから脱却しようとした中臣さんが行き着いた一つの答えでもある。美しい色が連なり響き合い、竹そのものの「直線的でありながら、適度なゆらぎを持つ」という特性が活かされ、国外からの注目度も高い。

「もっと竹の仕事の幅を広げたい」という中臣さん。竹の編み方や構造に着目した建築家と一緒に、竹工芸の要素を建築に応用する方向も探っている。大好きな竹工芸が未来へ繋がるための中臣さんらしいアプローチは、今日も進化しつづけている。

中臣 一（なかとみ・はじめ）

大阪府生まれ。竹工芸訓練センターで2年間基礎を習得した後、本田聖流しょうりゅう氏に師事、2005年独立。伝統的な手法を駆使して新鮮な発想の花籠を作る一方、竹が自在に空を舞うかのごときアート作品を手がけている。ロンドンやニューヨークなどの国際アートフェアに出展。作品はフィラデルフィア美術館などに収蔵。地元小中学校で竹のワークショップを行うなど、竹工芸の裾野を広げる活動にも積極的。

www.h-nakatomi.com

3月27日～7月16日 台北当代工芸設計分館「2017 現代国際竹芸展」

左：「ムスピ花籠」。中央の「結び」としなやかにくびれた曲線のフォルムから、竹ならではの張りや弾力、はんなりとした美しさが伝わってくる作品。二重構造になっており、内側は紫、外側は紅色で染色し、それぞれ艶消しの漆を塗って仕上げる。

下：自身の結婚を機に制作した、長方形の「黒竹共縁花籠」。本体は柔らかなハートのモチーフが外に広がっていくイメージで、持ち手は着脱可能。花籠を作るのもアート作品を作るのも「いいものを作りたいという気持ちに境目はない」。

(p.033)

右：「Prism Triangle 赤と黒」。デザイナーと組んで仕事をしてから色への関心が増し、さまざまな色や染め方を試してみた。しかし「伝統的ではありますが、やはり染料と漆の組み合わせが竹細工には最適ですね」。

上：棚に美しく収められた「プリズム」シリーズのパーツ。三角形の竹ひご同士の接点は、それぞれ斜めに削って接着する。

p.034

竹工芸の聖地を旅する

日本一の真竹の産地である大分県の中でも、別府は聖地ともいえる場所。15世紀頃に行商用の籠を作って売り出したのが始まりとされ、現在も名品を間近に見ることができる美術館や、日本で唯一の竹細工を教える専門学校「竹工芸訓練センター」、良質な竹工芸品を買えるお店があり、多くの職人や作家が創作の拠点としている。

そんな別府を、「竹好き」としてさまざまなアイテムをスタイリングに活用し、プライベートでも愛用しているインテリアスタイリストの横瀬多美保さんが訪ねた。

「清潔感があり清楚なイメージの竹は、大好きな素材の一つ。キッチンツールや食卓で使う小物だけでなく、文箱やちよつとした日用品の容れ物としても愛用しています」

かねてから別府を訪れ、思う存分竹の工芸品を見たいと考えていた横瀬さん。竹に包まれる宿に滞在し、竹細工にまつわる場所を巡る。

●まるで美術館のような「竹づくしの宿」

温泉地としても知られる別府の中でも閑静な地に立つ「もみや」は、知る人ぞ知る竹づくしの宿。天井やテラスの建材、照明や客室のアメニティ入れ、食卓膳、脱衣籠、廊下の消火器カバーにいたるまで、あらゆるところに竹が用いられている。客室の床の間や書院には先代が集めた名匠の作品がさりげなく飾られ、贅沢なひとときを過ごすことができる。

今回横瀬さんが宿泊した「桔梗の間」(写真)は天井に六つ目編みの竹があしらわれ、「朝目覚めて最初に目に入るのが、竹。幸せな気分になります」。

割烹旅館 もみや

大分県別府市上田の湯町 5-22

1室2名利用で1泊2食付き

1名2万4990円～。

info@beppu-momiya.jp

beppu-momiya.jp

●歴代名工の作品に触れる小さな竹の美術館

モウソウチクでつくられた床が清々しい「別府市竹細工伝統産業会館」。竹のアーチをぐりぬけた先には、竹工芸家として初めて人間国宝に認定された生野祥雲^{しょうのしょうんさい}ら名匠による美術品、竹の生活用品などといった竹細工製品の展示が充実。職人たちの系譜図や編み方の技法も展示され、竹について知りたいならまず訪れたい場所だ。1週間前に予約をすれば、2階のサロン工房で小さな竹鈴や花籠づくりにも挑戦できる(400～1000円)。

別府市竹細工伝統産業会館

大分県別府市東荘園 8-3

別府駅より車で約10分

8:30～17:00

入館料:300円 月曜休館

takezaiku@city.beppu.oita.jp

www.city.beppu.oita.jp/06sisetu/takezaiku/takezaiku.html

照明、パーティションも竹材を使用。上写真右手に写るのは田辺信幸の大作「雲籠」。ほかにも竹細工に欠かせない道具や、エジソンが発明した竹フィラメントを使用した白熱電球など、貴重な展示が揃う。

●作り手と使い手を最前線で繋ぐ

今号登場した竹細工作家たちが、「本物の作品が購入できる」と口を揃えるのが、美術品から日用品まで幅広く取り揃える「竹工芸山正」^{ちくこうげいやましよう}。1948年の創業時から国産の竹製品にこだわり、店内には大分県産を中心とした竹の盛り籠に花籠、カトラリーなどが所狭しと並ぶ。二代、三代続く常連さんが多いのも長く使用できる竹ならではの。3代目店主の片山マサさんは、竹細工に携わる人々のお母さん的な存在。竹細工の歴史に出会えるお店で、時間を忘れてお買い物。

竹工芸山正

大分県別府市楠町 4-9

Fax 0977-23-0561

10:00～18:00

無休(臨時休業あり)

beppu.yamasho@gmail.com